

沖

俳句雑誌[おき]

3月号

沖 発行所

柊 鯛

能村 研三

「ご恩返し」の思想

作家の井上ひさしさんが、市川で一番力を注いでいたのが「よみつこ運動」である、これは「①本を読むことで読書の楽しみを味わい、②地域の子どもたちと大人が本を通じて知り合いになり、③本を読んだ子どもたちが大人からお金を得て、それをそっくり世の中の役立ちそうなどころへ寄付をする」という地域運動で、会場となった市内の小学校には何度もお越しいただきご指導下さった。昨年は五回目を迎えたが、市川の子どもたちの社会貢献は、地震と津波で大きな被害のあった岩手県の大槌町の子供たちへの本のプレゼントであった。この話は、NHKの報道番組「ニュース9」でも全国に大きく報道された。大槌町は、井上さんの作品の『吉里吉里人』や『ひよっこりひよたん島』の舞台となったところでもある。

井上さんは、私たちに「ご恩返し」という言葉をよく使われた。直接的に「恩」を返すのが、「恩返し」。「恩」をいろいろな方に回して送っていくのが「ご恩返し」。

井上ひさしさんは中学生時代、岩手県一関市の本屋で国語辞書を万引きしようとして、店番のおばあさん

日脚伸ぶ眼鏡二つを使ひ分け

野火走る固き拳がポケットに

大楯の言葉醸すふつつと

残り鶴片足立ちの眠りかな

断崖の松の根力春寒し
柀鱗吾が背目安に挿してをり
蛍光ペン咲かす筆立卒業す
啓蟄や活字離れの世が進む
地下深度増ゆ新線の朧かな
霾曇倒し走りのバイクかな

に見つかった。「そういうことをすると、私たちは食べていけなくなるんですよ。」おばあさんは厳しくたしなめ、薪割りを命じた。罰だと思つて井上さんは薪割りをした。するとおばあさんは国語辞書を渡して言った。「働けば、こうして買えるのよ。」「おばあさんは僕に、まっとうに生きることを意味を教えてくださいませんか。」井上さんは「返しても、返しきれない恩義」と振り返っている。四十年以上の歳月の後、大作家となった井上さんは、一閃で何でもボランティアの文章講座を開く。それを井上さんは「ご恩返し」と言い表している。誰かから受けた恩を直接返すのではなく、別の人に送る。その人がまた別の人に渡す。恩がぐるぐる世の中を回るのだ。

俳句の世界でも、連衆という言葉があるが、一人で俳句を作るのではなく、結社に集まる仲間たちが、句会でお互いに研鑽を積むこともこの「ご恩返し」の思想である。句会に集う仲間は勿論、遠く離れた地方の会員の方々とも心を一つにして交流をしていきたい。

蒼茫集



存 在

吉田政江

研師来てつくばならひを確かむる
守護神は文珠菩薩や年惜しむ
存在のまだあり空の屠蘇袋
福沸し両手に馴染む萩茶碗
寒波来る根菜縦に持ち替へて
菓喰下目づかひの眼鏡かな

寒 稽 古

吉田陽代

花柀見舞ふをひかへ祈りけり
杖つくと友のひとこと賀状くる
寒に入る守りにすぎしわが身かな
子の書初骨太なるを選びけり
竹刀負ふ背のまだ少年や寒稽古
少年の一礼みごと寒稽古

即 ち

辻美奈子

合掌を解けば即ち悴めり
鏡餅据え太陽の重さとは
松過の夕星ひとつ新しく
冬日燦々どんどん恐いものが減る
雪降りり脳につかはぬところあり
きさらぎや猫のねむりは水のごとし

積 載 量

千田百里

のぞみ号の胴内あるく師走かな
始発バス来てあら玉の村うごく
絞り器の螺旋にレモン押す四日
積載量に我ありエレベーター寒し
鳩亭を訪ふや此度も初電車
目薬をさし寒晴に打つて出づ

整 列 安居正浩

ドーナツの穴の整列寒波来る
子が二人来て夜回りの意気上がる
首通すときセーターへ甘え癖
クリスマス夜明けの卓に金の紐
空気圧ばんばんにする年用意
薄氷に次の世透かし見る気分

獏 枕 北川英子

一陽来復朝餉は窓の雀とパン
片しぐれバツクミラーに没日燦
雪積むや四角四面の丸くなり
麩屋通り三条下る 獏 枕
海までの雪ひと色や魂鎮め
その内に逢はう逢はうと寒の訃や

平成の疎開 藤原照子

ちちははの棄てし故郷根雪来る
平成の疎開尾をひき除夜の鐘

牡蠣剥くやひとりひとりの音を積み
紙漉きのひと日の嵩や腰力
湯ざめして母似の声のひとりごと
立ち上る北斗七星樹氷林

奉納 錨 遠藤真砂明

隼の翔つや日の出の荒磯崎
はればれと一切空の初山河
奉納の錨直立寒波来る
海の入日へ寒釣りのひとり立ち
冬日輪マストに掲げ出航す
いきいきと荷揚埠頭の空つ風
煙 突 辻 直 美

あと言へば初雪といふ声のして
探偵ポアロ年末年始休業す
煙突のめつきり減つて初景色
手毬唄先のいくさを知る世代
立春大吉日差しは夫の気配とも
凧といふ文字凧らしく揚がりたる

漆 黒 荒井千佐代

短日の灯ともし葬儀弥撒を弾く
目貼りせり心の罅も余すなく
ピザ用の丸きカッター聖夜餐
大年の暮るる長崎山囲ひ
聖鐘やしろがね長き除夜の水尾
漆黒の闇は海なり除夜詣
明 日 宮内とし子

雪もよひ体温計のちちと鳴る
鳶の描く輪の大きさよ福詣
こがらしに裏声のあり小節あり
灯台の白より白く冬の波
四日はやファスナー布を噛みにけり
みちのくの鷹舞ふ明日を信じけり
喜 寿 小山田子鬼

死神に一步近づくと日向ぼこ
真つ暗な夜空をたたく大噓
セーターをくぐりて気づく誕生日
雪搔きの音のこもりて降り止まず
難聴の笑ひ初めでありにけり
どんどの火煽りて喜寿のこころざし

歩 幅 細川洋子

みづうみは光の器クリスマス
脇役がいい味出して根深汁
初日記まつさらてふは発光す
合流の川の夕潮寒かりし
松過ぎて歩幅大きくしてゐたり
水面の揺れ忘れてゐたり浮寝鳥
大 噓 森岡正作

空きつ腹にずんと鮪の解体ショー
短日を擦り江ノ電のすれ違ふ
煤逃げの勢へり囲碁の敵討ち
大嘘して哲学も無かりけり
熱爛やまた鬼平を気取りたる
炬燵出て次の居場所のなかりけり
時間の積木 千田 敬

岩水柱日矢に負けじと身を削ぎぬ
薄氷のよべの風紋記録かな
過去といふ時間の積木冬茜
切抜きもはや積読に年明くる
覗き窓あるビル工事覗きて寒
初夢主宰に「翼」の句ありての先生背に翼あり

初電車 菅谷たけし

岬発陽がいつぱいの初電車
白鳥や薄日差すまで空忘じ
眼裏は浄土の色か日向ぼこ
冬菜畑山も民話もなき故郷
抽斗の小部屋仕切りも年用意
一陽来復蔵の裏にも日の廻る

日の光 武藤嘉子

日の光吸うてくれなぬ冬のぼら
裸木の影をすくうて砂場の子
霜の道遊びごころの音たてて
綿虫を追ひし日は身の軽かりき
枯野道すこしおくれ私みて
対岸の灯の模糊として枯尾花
寒満月 久染康子
シーソーの下濡れ残る夕時雨
老支度その道みちの冬支度
スカイツリー寒満月を突いてをり

樹齡千年洞に注連張る裏参道
木の間より見る凍滝の一本気
炊きたてに日向のほふ齋粥

玄界灘 楠原幹子

かいつぶり人の思案の外にかな
冬怒濤玄界灘の夕日消す
荒るる海見てきし夜の河豚雑炊
寒々と麒麟の首の長さかな
正体のなきまで蓮の枯れてをり
冬の月武蔵野線を長き貨車

荒岬 渡部節郎

靴音に右と左の霜夜かな
「芝浜」を語る談志で年惜しむ
一条の轍残りし冬田かな
その中に甘えし声や笹子鳴く
初富士のせり上がりくる峠かな
初御空鳶に預けて荒岬

潮鳴集

木綿糸 小嶋洋子

冬麗やとなりの駅の見ゆる駅
もしやこれが綿虫手足探しみる
木枯来コピー用紙の静電気
みかんの皮形状記憶してゐたり
冬萌や和本をとどる木綿糸

跳べ！ 栗原公子

綿虫や喪中葉書に銀の杵
初夢に笑ひし声の記憶のみ
雪くるか色にあふるる玩具箱
みどりごに淡き乳の香福寿草
駆け抜けよ！跳べ！面構へよきフガ

木枯 掛井広通

木枯は海恋ひ人は人を恋ふ
巻き戻し出来ぬ地球よ毛糸編む
冬麗の石を拾へば石匂ふ
落葉踏む音は心音かと思ふ
ふつつと詩の満ちてきて餅焦がす

睡魔 井原美鳥

大樟が風の矢面札納
宝船どこから見ても過積載
一月の月かうかうとガラス質
梟に和したくて吹く壘の口
暖房車睡魔のりしは五井あたり



沖作品



能村研三選

古稀すぎて若手といはれ冬うらら

鱈酒や上がり櫃の大福帳

新海苔を二・四・八と折る朝餉

セーターの赤着て気合入れなほす

濯ぎもの冬の日差しもたたみこむ

裸木の研ぎ澄まされし形かな

夫婦岩注連縄掛けて繋ぎけり

箱河豚の箱の中身は何ならむ

木菟の耳の尖りて売られをり

胸張つて長元坊の売られをり

どちらかが一人となる日初しぐれ

茶の花や泣くこともなく生きてをり

青天のどこかほころび風花す

短日の駅舎学生呑み込めり

冬怒濤呑まれし民の声かとも

市川市

町山 公孝

岐阜

花田 心作

茨城

岡澤 田鶴

急くほどに事の進まぬ師走かな

在りし日のはらから偲び葛湯吹く

木々よりの散りしを糧に山眠る

恙なく生きる力の初明り

迫力に身じろぎ出来ぬ寒稽古

小鳥来る逆さに立てるマヨネーズ

擦り抜けて行く新宿の駅師走

着ぐれて使ひこなせぬスマートフォン

MR1 暫し異界の十二月

終の花や孤独を飼ひ馴らし

湯の町の湯の香豊かに冬銀河

寒灯の点りて日本一の塔

冬の海風に凭れて見てゐたり

古書店はうなぎの寝床日脚伸び

息白し輓馬のなせる自己主張

新潟

小栗 八重

千葉

座古 稔子

神戸やすを

沖作品 15句選評

*
能村研三

新海苔を二・四・八と折る朝餉 町山 公孝

先師登四郎から「食べ物は美味しく詠まなくてはいけない」とよく言われた。海苔は十月半ば頃から翌年の三月頃まで採れるがその走りの海苔を新海苔という。やわらかく、香り高い風味は新海苔の特徴でもある。海苔はいろいろな使い方があって、その用途によって切り方も異なってくる。板海苔の一枚は全形とか大判とも呼ばれるが、板海苔を横に二つに切るとおにぎりや手巻寿司に使われる。ただ朝餉に使うには、ぱりぱりと焼いた板海苔をまず二つに切って、次にそれを半分にさらににはそれを半分にする。つまり八等分されたことによる。町山さんは建築の設計士でもおられるので、海苔の切り方にもこだわりがあり、図面に線を引くように几帳面に切られたのだらう。中七の「二・四・八」という表現が何か新鮮に感じた。

裸木の研ぎ澄まされし形かな 花田 心作

すっかり葉を落してしまった木々。飾り気もなにも無い姿は清々しく感じる。青々と茂った木々も美しいけれど、凜とした冬の晴天の下なんともしなやか、気持も晴れてくる。見ようによつては、まるで彫刻みたいにも見える。白い木肌が光を反射して、神々しいばかりの美しさである。静まりかえった冬の森には、「裸木の美しさ」が特出する。樺の木などは細枝がレースのように交差して研ぎ澄まされた美しさを醸し出す。

青天のどこかほころび風花す 岡澤 田鶴

青天に雪が飛んでくるのを「風花」という。ちらちらと来る程度で濡れるほどではない。山などに降り積った雪が風によって飛ばされ、小雪がちらつく現象で、冬型の気圧配置が強まり、大陸から日本列島に寒気が押し寄せてくると日本海側で雪が降るが、その雪雲の一部が日本列島の中央にある山脈を越え、太平洋側に流れ込んできたときに風花が見られる。雪よりもかえって寒く感じられる。これを晴天のほころびと捉えたのは出色である。

迫力に身じろぎ出来ぬ寒稽古 小栗 八重

一年中で一番寒い寒の時期に、剣道や柔道、空手、合気道などの武道で稽古をつける。この句はおそらく剣道の場面であろうか。特に剣道は単なる格闘技ではなく、間合を大切にしている。相手と対峙した時の相互の立会の間隔など、相手が強い相手であればその迫力に身じろぎ一つ出来ない緊張の時間が続く。

(以下略)